

遼金元時代北京地区の仏教史の研究

—契丹時代燕京地方の塩産地と仏教—

古松 崇志
京都大学人文科学研究所 助教

緒言

10世紀から14世紀にかけて、中国北方は、遊牧民・狩猟民の部族集団が中核となってあいついで建国した遼(契丹)・金(女真)・元(モンゴル)の支配下にあった。現在の首都北京が中国北方の政治中心地として発展しはじめたのは、この時代のことである。本研究は、北京市およびその周辺で新発見があいつぐ遼・金・元代の仏教関連の石刻資料を主材料に、さまざまな仏教寺院や仏僧にかんする史実を抽出してその歴史的な位置づけを分析することにより、国家と仏教勢力の関係や社会における仏教信仰の様相などを明らかにし、当時大きな社会的影響力を持っていた仏教の歴史をより具体的に描き出すことを目指すものである。この研究で得られた成果をふまえ、前代の唐末も視野に入れつつ、8世紀半ばから14世紀にかけてユーラシア東北部で流行した仏教の連続性と変化の諸相を浮き彫りにするとともに、従来不明な点の多い遼・金・元時代北京地区における国家の支配や社会の実態の解明に資する材料を提供したい。

今年度の研究では、北京の北京大学図書館・中国国家図書館、台北の中央研究院歴史語言研究所傅斯年図書館においておこなった遼・金・元代の仏教石刻拓本の調査にもとづき、如上の研究の一端として、まずは契丹(遼)時代の燕京地方における塩生産や商業の発展と仏教勢力の拡大との関係について明らかにした。下記にその成果について報告する。

研究成果——歴史的背景と調査資料の紹介

1. 契丹時代の燕京地方支配と塩産地

10世紀初頭にモンゴリア東部大興安嶺山脈南端一帯から勃興した遊牧部族集団契丹族によって建てられた契丹国(遼)は、東は遼東一帯から沿海州、西はモンゴル高原からアルタイ方面、南は華北北部におよぶ広大な領域を直接・間接に統治し、南方の華北にあいついで成立した五代・北宋、西方の西夏やウイグル、朝鮮半島の高

麗といった諸政権と併存しつつ、10世紀から12世紀前半に至るまでユーラシア東方の覇者として繁栄を誇った。本報告でとりあつかう北京地区は、古来「中華本土」の北辺に位置し、農耕地域と遊牧地域の接壤地帯にあたり、多様な種族や人間集団が入り混じる土地柄であった。唐代には領域の東北辺境であったのが、10世紀前半に契丹の支配下に入ると、燕京と呼ばれた当地一帯は、北から南へと膨張していく契丹国の前線辺境地帯に変貌した。そして、五京のひとつ南京が置かれて、契丹国の南方の支配拠点となり、国家の資本投下により開発が進められた。1004年の澶淵の盟以後は、友好関係を結んだ契丹・宋両国間の交流が活発化し、燕京は契丹国内最大の人口を擁する都市として繁栄をきわめた。

中華の北辺を領域にとりこんだ契丹は、政権中枢は遊牧国家の特徴を維持しながらも、統治制度は唐制をおおいにとり入れたものとなった。安史の乱以後に唐王朝の国家財政の大きな部分を占めるようになった塩の専売制度も契丹統治下において導入され、官の管理下で塩の生産・販売をおこなう「榷塩」制度が施行されていた。

契丹の塩政については文献の貧困のため不明な点が多いが、燕京地方については、香河县新倉鎮(のちの宝坻県)に榷塩院が、玉田県永濟務(のちの豊潤県)に永濟塩院が置かれていて、契丹末期には毎年合計22万石(約2万kl)もの生産額があったことが分かっている(郭正忠1997)。契丹領内の榷塩の税額は低く設定されていたため、重税を課して塩価の高かった南の宋へと国境を越える塩の密輸が盛んにおこなわれていた(廖隆盛1981)。

2. 燕京地方塩産地の仏教石刻

この燕京地方の塩産地の社会状況について知るための有用な史料が石刻資料である。最初に、新倉鎮にあった「広濟寺仏殿記」(太平五年(1025)立石、拓本:北京大学図書館・中国国家図書館所蔵)を紹介する。まず注目されるのが、榷塩院の置かれた新倉が、西は燕京に近く(実際の距離は約80km)、東は水運により海路に通じた

交通の要衝となって、多くの客商と物資が集まっていたという、当時の実状を記している点である。東の海路水運の記述は重要であり、燕京と遼東方面を結ぶ海上交通を想定できるし、塩を積載した船が契丹・宋の国境河川（界河）上を涿州や易州まで遡上したという宋の文献史料の記述と符合する。碑文の主題は、広濟寺という寺院の創建と拡張の事業についてである。弘演なる僧が権塩院の官や地元の富民の布施を得て寺院を創建し、亭舎・法堂・僧院・厨舎・浴堂といった施設を順次建設していった。その後、門人の道広が頭陀僧の協力を得て、地元有力者によって結成された邑会から多額の布施を得て、仏殿と山門を建立した。碑文は仏殿建立を記念して書かれ建てられたもので、寺院伽藍の荘厳を讃える。契丹時代、これにくわえて高さ 50m を越える木塔も建てられたことが明碑の記述より知られ、当時の寺の繁栄ぶりがうかがわれる。なお、仏殿は民国期まで残存し、30 年代には梁思成の营造学社による建築の調査・研究がおこなわれたが（梁思成 1932）、国共内戦時に破壊された。

北京大学図書館には、この石碑の碑陰・碑側と考えられる拓本も収蔵されている。碑額には仏像が刻まれ、碑身には寺の建設を援助した人びとの名前が列挙される。当地の有力者の官の名や、仏教信仰に結集した邑会とその成員の人名などが見えていて、契丹における仏教信仰と国家・社会のかかわりを考えるうえで貴重な情報を提供する。碑陰はこれまで未発表で、筆者は別稿において碑陽とあわせて録文を提示し、詳細な考察をおこなう予定である。

つぎに、永濟務の仏教寺院について、金代に建てられた「大金薊州玉田県永濟務大天宮寺記」（大定 12 年（1172）立石、拓本：北京大学図書館所蔵）を紹介する。金代の碑文だが、契丹時代の創建以来の寺史が記されていて、11 世紀半ばに塩の専売をとり仕切る塩院に勤める張日成なる人物が中心になって創建したことが知られる。寺院の伽藍は正殿、南北の堂、僧堂、鐘楼、山門などから成り、数百人もの僧が暮らす巨刹であった。その後、張日成の子が続けて檀越となり、舍利を奉安した十三層から成る仏塔や三間の堂を建立、庵二区画を増築した。さらに、寺と永濟務の二箇所に「施息庫」を設け、広大な荘園を寄進して、寺の経営費用に充てた。寺は契丹朝廷の認可を受けて、1097 年に「極楽院」、1105 年に「天宮寺」の寺額を賜った。この碑文じたいは、金代になってから、以前寄進された荘園を寺の土地として登録することを認める勅牒という文書が朝廷より発給され

たことを記念し、それを永遠に伝えるために建てられたものである。なお、この碑文にみえる十三層の塔は現存し、1976 年の唐山地震で壊れ、1988 年に修理をおこなうさいに、塔内より契丹刻本の仏教経典が発見されたことで有名である（陳国瑩 1989）。

また、永濟務附近にもいくつかの寺院遺跡が確認できるが、一例として、永濟の北 15km あまりに位置する陳宮山觀鷄寺が挙げられる。この寺に残された石刻資料が「大遼景州陳宮山觀鷄寺碑銘并序」（大安 9 年（1093）立石、拓本：北京大学図書館・中央研究院歴史語言研究所傅斯年図書館所蔵）である。創建は唐代以前に遡る古刹で、契丹に入ってから寺史を記すが、石碑が建てられた当時には、仏殿・法堂・僧院・厨房・宿坊などの伽藍をそなえ、居住する僧は 100 人あまりに達する大寺院となっていたことを伝える。塩の集散地である近くの永濟務に属寺を持ち、そこには店舎（宿泊施設）を置いて商業経営をおこなっていた。そして、典庫錢（貸金業の元手）・莊園・山林・果木といった寺院財産の具体的な数字が記されており、当時の寺院経営の実態を示す非常に貴重な史料となっている。寺院の経営は、典庫による貸金業と莊園から挙がる収益をもとに維持されていたのである。

考 察

以上、塩産地およびその周辺に建てられた仏教寺院の実態を伝える石刻資料を数点紹介した。少ないながら伝存したこれらの石刻資料に記された実例より看取できるのは、いずれの寺院も完備した立派な伽藍を備え、数多くの僧侶を擁して、相当の規模を誇っていたことである。そして、当時政権が熱心に刊刻・流布していた大蔵経（契丹蔵）を備置する寺院もあり、大蔵経をもちいて講経法会が開かれるなど、宗教活動もさかんにおこなわれていた。これらの寺院の檀越は塩の専売などにたずさわる財務官僚や在地の富商（客商も含まれる可能性が高い）といった都市住民であり、彼らの寄進した荘園や典庫の設置・運用によって寺院経営が維持されていた。そして、陳宮山觀鷄寺のように、塩院の置かれた町に店舎を設け、塩を取引するために集まった商人を相手にした商業経営に参入した事例もみられる。すなわち、この地域での仏教寺院の発展は、契丹国家の主導による塩産地の繁栄と密接にかかわるものなのであった。事実、ここに紹介した寺院のいずれもが、契丹時代になってから創建されたか、あるいはその規模を拡大させたかして、国家に

よる燕京地方の開発の推進と軌を一にして仏教勢力の拡大がみられたことがうかがわれる。逆に言えば、仏教勢力の繁栄を示すこれらの石刻資料の記述は、典籍文献からはほとんどうかがうことのできない当地の活況を具体的に示す貴重な史料として、今後おおいに活用していく必要があるだろう。

要 約

本研究は北京地区の仏教関連石刻資料の調査・研究をつうじて、遼（契丹）・金・元（モンゴル）時代の仏教と国家・社会のかかわりを考究することを目指すものである。本年度の研究では、契丹時代燕京地方の塩産地附近の仏教寺院に立てられた碑刻資料を材料として、当地の仏教寺院の具体像を明らかにした。これらの寺院は塩産地の財務官僚や商人などの都市住民の経済力によって支えられており、仏教勢力の拡大は国家の資本投下による塩産地の発展を背景に成し遂げられたと考えられる。こうした本研究の視角は、文献の貧困のため不明な部分

が多い燕京地方での国家支配のしくみや在地社会の実像に接近するひとつの突破口として、今後の当該分野の研究の指針となりうるものである。

謝 辞

本研究を遂行するにあたって、財団法人三島海雲記念財団より学術研究奨励金を賜りました。財団の関係各位に深く感謝申し上げます。研究はまだ発展途上ですが、今回の研究助成にもとづく成果を基礎にして、さらなる展開を期する所存です。

参考文献

- 1) 郭正忠（主編）1997『中国塩業史 古代編』北京：人民出版社。
- 2) 陳国瑩 1989「豊潤天宮寺保護工程及発現的重要遼代文物」『文物春秋』創刊号。
- 3) 梁思成 1932「宝坻県広濟寺三大士殿」『中国营造学社匯刊』3卷4期。
- 4) 廖隆盛 1981「北宋与遼夏边境的走私貿易問題」『食貨月刊復刊』10卷11・12期。